



高木市之助全集

第四卷

講談社

高木市之助全集 第四卷

雜草万葉・古典随想

昭和五十一年十一月二十日 第一刷発行

著者 高木市之助

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―一二二・郵便番号一二二

電話・東京(〇三)九四五―一二一(大代表)

振替・東京八一三九三〇

印刷所 株式会社精興社

製本所 牧製本印刷株式会社

©高木市之助 昭和五十一年

落丁本・乱丁本はお取りかえいたします

目次

I 雑草万葉

雑草の意味	3
雑草歌人意吉麻呂	17
つきくさ	29
或る宮廷歌人の実力	43
つばき	56
某自然歌人の場合	70
その一 霊峰	70
その二 手児名の墓	82
松	94

鹿のこよみ	105
女性三題	117
その一 あま	117
その二 遊行	135
その三 つり橋	143
水	157
酒	168
民謡二題	193
その一 前向きとうしろ向き	193
その二 防人歌	206
相聞二題	220
その一 贈答歌	220
その二 七夕歌	230
観想と風土	242
その一 無常	242

その二 風土.....254

附 万葉と非万葉.....267

ほずみ橋.....281

私の万葉五十年.....286

II 古典随想

古典を占う.....299

古事記 1 現代の眼.....321

2 古典の秋.....326

白鳥陵.....326

万葉十二ヶ月.....327

万葉学一千年.....361

能登みやげ.....363

万葉の高松論争をめぐる.....366

英雄万葉	370
民謡万葉——漫談ふうに	375
中国土産	381
万葉の人気	388
光彩の春	391
万葉と鮎ずし	394
或る女	397
三輪山の歌そぞろごと	400
萩の歌	404
讃酒の弁	407
万葉文化と花	411
作品の変革ということ	426
参考保元平治物語の思い出	428
建礼門院右京太夫と私	432

名歌は成長する	437
平曲について	439
平曲とは	442
世阿弥の遺作面を夢みて	444
物ぐるいの代表「百万」	446
通小町	447
景清について	448
伊勢物語と杜若	450
盛久と現代	454
山姥はなぜこんなにおもしろいか	456
契沖を憶う	457
かぶき通とかぶき研究	461
一つの課題	463
近松の読みなおし	466

こんな憶良のファンもいた	469
暁台	473
野村望東尼	479
遠方ながら母見て居申	482
布留散東	485
歌よみの歌と書家の書	488
かるた評判記	494
唐詩選と李長吉歌詩集	498
解説	502
大久保正	
中西達治	515

I
雜
草
萬
葉

雑草の意味

私の草庵の自慢の一つは四季を通じて落葉が一面に散りしいて雑草が生えないということである。だからうちでは掃除といえ、小径の落葉を両側へ掃きよせることでしかない。背中をまるく、地上にうづくまって草をむしるなどという必要はない。これは少々オーバーな言い方で気がとがめるが、年に何回か近所の小母さんに来てもらって雑草をとってもらえば結構ことは足る。

さてこのように草むしりというめんどうくさい労働の対象として、そのようなめんどうが少ないことを自慢の種にする「雑草」を試みに万葉に冠して本稿の主題とするのには多少の言いわけが要るかとも考えてのこのブログなのだが、「雑草万葉」という題名は曖昧このうえもない。だいいち雑草という言葉が明瞭でない。近頃急に流行しだしたクコという薬草があるが、あの薬草は関東では湘南地方一面に、また中部地方では知多半島や伊勢の付近一帯に野生していたそうだが、それらの野生地を知っている人が採りに行くといまでは一本も無くなってしまうという話を、ちょうど三つの地方から前後して聞かされた。なんの用途もない野生のこの草は一応雑草と呼んでもよいが、それが野生のありかたを消して、老人の住宅の庭の片隅などに不老長生の薬として栽培されるとなると、もう雑草ではない。もっともずっとさかのぼって王朝の本草などでは薬草として説明されているそうだが、

それは山野に自生していた、藁草であって同時に雑草であったかもしれない。このような曖昧な、雑草に似た野生の草で同時に実用化された草は万葉集にも見えるところで、たとえば原始時代染色の料
に使用された月草なども、後には染色の用途を失い、今日では私の草庵をとりまいて叢生する雑草で
あるが、実用化されていた時代に、なんの用途も無い一般の雑草と人々は同一視したかどうか。さら
に鑑賞用としてときには自生し、ときには栽培される草になるとそれを雑草扱いすることにわれわれ
は躊躇させられる。などと考えていくと今日雑草という名称が、山草野草などという今日の呼称に対し
てももっと不明確であることがわかり、しかもわれわれは日常語としては、山草や野草よりもっと
頻用し愛用さえしているかのようなものである。その雑草を万葉に冠して本稿の題にするなんて、考えてみ
ると厄介なことをしでかしたものである。

もっとも、いうまでもなく雑草万葉とは比喩的な私の呼称であって、植物学者が万葉の中から種々
の雑草を探しだして、あれはどんな植物的性格を持ち、これはその根や花にどんな実用的役割を演じ
たかと検出するのは、まったく異なっているから、この点扱いやすいといえなくもないが、それで
は万葉所収歌中どんな作品を雑草的だととえるかという段になると、なかなかむづかしい問題になる。
いや、このことこそ実は文学論を引き出す、いちばん重要なポイントになる？ かもしれない。この
へんから私はそろそろ私見を加えてこなければならず、それはときには自分自身にしか通用しかねる
文字どおりの卑見であり、ときには、私独自の見解などと思いがあってみたくなることもある。い
ったい万葉四千五百余首の中から代表的な作品を採択する操作はかなり古くから、たとえば真淵の新
採百首などの試みとして行われ、最近でも山本健吉、池田弥三郎両氏の『万葉百歌』（昭和三十八年中

中央公論社刊) となって、続いてきている。百首を採択する標準は選択者自身の見解によるものであるから必ずしも「優秀」とは限らないが、何らかの意味で万葉を代表するものではあるであろう。ところが「雑草」という言葉の中に含ませようとする私の意味は、一口にいってちょうどその裏である。

つまり万葉を代表するなどとはいえない何ものかが雑草なのである。そんな作品は一本の雑草として万葉の花園なり、歴史なりから、草取りの小母さんによって取り捨てられてもよいであろうか。たぶんそうであろう。しかしまた考え直してみると、雑草は一つの凡庸者として、代表的な性格を持ち合わせないことによってとかく百首歌などの選には漏れがちであるけれども、雑草の持つこの凡庸性は、凡庸性そのものによって、代表性の作歌とはうらうえのどこかでなにかの別の意味を持つてはいないか。代表的作歌が万葉集を代表しているということは、これらの作歌が一面、万葉集作歌か他のどのような作歌にもつながる他のもっと非代表的な、つまり凡庸な作歌にささえられているということであり、それらの凡庸な作歌の示唆する声にもわれわれは耳を傾けなくてはならないのではないか。こういうふうと考えていくところにわれわれは雑草の一つの意味を求めることができる。

しかしわれわれは雑草のもっと別の意味を求めることもできそうである。私はいま雑草を凡庸性によって捉えてみた。しかし雑草のすべてが凡庸であろうか。こうした疑問の中にも問題は潜んでいるようである。雑草の中でいちばんの雑草としてわれわれはたぶん鉄道草を数えることを拒むことはできない。とりわけ植物学に弱い私にいまここで鉄道草の来歴を語る資格などはないが、いつかある酒席? で聞いたところによれば、この雑草に鉄道草という名がついたのは、この草が鉄道の敷設とともにあつたという間に分布していったためで、今日鉄道の通じたところにこの草を見ないところはない

からだというのである。もしこれが事実なら、鉄道草の持つこのたくましい開拓精神は、近代流行するバラや洋蘭のレジャー精神には求められないところであり、それは雑草万葉に冠した雑草という比喩語の別の意味ではなからうか。

雑草という語にはさらに第三の比喩的意味を考えることができるようである。それは雑草によってある日常性、尋常性とも呼ばれそうな性格が思い浮かべられるということである。といってもそこには上述の凡庸性とか開拓精神とかいったものと交錯する何ものかがないわけではないが、もちろん、両者はまったくの同義語としてかさねあわされるようなものでないことも確かである。日常性尋常性に対置される言葉としてわれわれは異常性非常性を考えることができる。今日われわれが経験するいわゆる人生の中には、ときとして大きな波瀾が起こってわれわれに異常な驚異の感情を起こす。具體的な事例でいえば、戦争が勃発して戦場に駆り立てられ、そこで生命を賭けて相互に相闘うなどということは、われわれにとって異常あるいは非常な経験といわなくてはなるまい。それほどでなくとも、人の死はそれが突然かあるいは人為的に引き起こされれば引き起こされるほどわれわれは異常非常な経験としてそれを受け取るであろうし、そうでなくとも、死そのものの中には健康無事に生きている者にとって、やはりある異常非常なものとして彼らの感情なり経験なりをゆさぶるものが含まれている。もっといえば大規模な旅行や即位造営その他の宮廷行事なども驚異的な出来事として異常感を作者にもたらしたにちがいない。ところが今日のわれわれに比べて万葉の歌人たちの営む人生の中にはこうした異常な出来事が比較的頻繁に起こり、したがってそれらの出来事を素材とした印象的で多彩な歌が作られる場合もまた多かったといえよう。しかしながらそうした異常性ばかりが万葉人の

人生の構造のすべてではない。作者たちは異常な歴史的事件に耳をそばだて、旅次の珍しい山川の自然美に目をみはった歌作のひまひまに、ときには日々好日的ななんの奇もない日常性をうたいあげることはなかったか。前者が百花繚乱たる花園なら、後者はまさに雑草の小道のようなものであるという意味で、雑草の第三の意味を考えることもできよう。

雑草の第四の意味としてとりあげるにはあまりにも次元を異にする考え方もされないが、雑草がいたって孤独な表情を持つことも注意に値するであろう。雑草のすみかは公園でも邸宅でもない。近代の文化が彼らに与えた都会でのすみかといえ、いつも塵芥にまみれた、横丁か小路の忘れられたあき地ぐらいのものであろう。そこで彼らは踏みひしがれて生え、育ち、花咲き、実り、そうして枯れていく。このような雑草に対して、人々が作る歌が感ずるものはおそらく孤独の一語につきるのではあるまいか。

私は以上「雑草」の比喩的な意味のあれこれを前後左右ないし内外から次第不同に考えてみた。雑草と呼ばれる限り、あまり名譽でもないこの「雑」の一字にはまだまだ雑多な意味が拾い残されているにちがいないが、そんな列挙はここで端折って、それでは万葉の現実のどこにこんな雑草のはびこる余地があるかということについてほんの序説的に一言述べておきたい。万葉という歌集は、よくいわれるように、かなり手入れの行き届いた、いってみれば庭園でもあるが、もしもこの庭園？を平安朝以後の勅撰集などに比べるなら、だいぶ様相がちがう。それはそのまま雑木林や丘陵などにながったりして、まだ手の入らない自然のままの、いってみれば庭園ばなれのした庭園なのである。花壇や芝生の隅々には雑草がまだいくとも生えているというのが真相であろう。たとえば皇室やそれ

をとり巻く交遊の間に作られた歌群はある程度造園のあとを想わせるが、一步奥のほうへ歩を運んでみれば、——という意味は勅撰に準ぜられている巻一、巻四、巻五ないし巻十五、以下の諸巻から、巻六、巻八、巻九などを経て、巻七、巻十一、巻十二から、さらに東歌や巻十三、巻十六などにわけ入るといふことの比喩でしかないが、——われわれは随所に庭園と呼ぶにはあまりにも自然のままに放置された景觀に接することができであろう。鉄道草や赤のまんまが伸びはびこって花壇の設計をおびやかしているといったところであろう。私はいま、一步奥のほうへと比喩的に言ったが、実は奥のほうへなど立ち入らなくとも雑草は生えているかもしれない。人麻呂、赤人などという豪華な花壇にだって雑草を探すことはできよう。それはつまりほかならぬ雑草万葉の生態なのである。

以上で、雑草万葉はなにかという難題が私自身どうやら見当がつきそうになった。そこで、問題をもう少し拡げて万葉自体のもつ雑草的意味について考えておきたい。さていま「万葉自体」といったがそんなものはとくに無くなっているのではないかということから問題は始まる。なるほど万葉集という二十巻から成る或る一個の歌集が誰か一人の編者によって編纂されたなどという、もの考え方はとつきの昔に通用しなくなり、二十巻は幾人かの編者によって集められた幾単位の集団がたぶん家持らしいある高度の教養人によって二十巻に集大成されたもの（もちろんその後の多少の増補も含めて）と考えられてきたが、最近ではこの過程を分析して原万葉集とはなにかという検討などが試みられ、それが巻一の何十首かにしづられかかっているありさまである。そんな万葉学の段階で空漠とした万葉自体などと呼ばわって見たところで意味をなさないではないかということが最初の問題なのである。しかし、卑見によれば、この問題にはそんなにむづかしくこだわるにはおよばないように思